



第四十七号

「秘蔵名曲選2」

メルマガnoichi47号。今月のテーマは『秘蔵名曲選2』。邦楽の隠れた名曲を発掘する企画・秘蔵名曲選。

昨年の一作目に続き、今回は唯是震一作曲「新三番叟」の動画をYouTubeにアップしました。

三味線の基礎固めにもよし、お弟子さんのお稽古にもよし、舞台に掛けるもよし。

有名な三番叟の旋律が身近に楽しめる名曲です。



新三番叟

三味線音楽には「三番叟」と名のつく演目・楽曲が数多くあります。

長唄の「舌出三番叟」、常磐津の「子宝三番叟」、義太夫の「寿式三番叟」等々、祝賀の曲として演奏されることが多いようです。

それら三番叟の中から器楽的に特徴のあるリズムや音型を主題として作曲されたのが「新三番叟」です。

「三番叟」とは、能楽の「翁（式三番）」の中の演目で、その三番叟の舞は、揉の段と鈴の段の二つに分れます。揉の段は、足で拍子をとる様が地面を踏み固める様子を、鈴の段では種を蒔くような動きがあり、五穀豊穡を願う舞とされています。

三弦はⅠが高音、Ⅱが主に低音を担っていて、冒頭のテーマとなっているリズムで毎回転調がなされています。二上りを中心に、Ⅰを全音上げた三下り、またはⅡを全音下げた本調子の調性を行ったり来たりしています（実際は二上りと本調子で演奏）。そこに緩急と強弱が細かくつけられ、高音と低音で明確に強弱が分かれたり、あるいは楽曲全体の強弱を両パートで表現したり、とてもメリハリが求められる曲でもあります。

今回の動画では、各パート二人ずつで演奏しましたが、人数をもっと多くして三味線音楽特有のユニゾン（unison）を楽しんだり、転調の練習などにも適した曲と言えると思います。尚、演奏に際しては、各部分の半拍の間（休符）を鼓のよう

↓次ページにつづく

にしつかりとったり、地歌における半音よりも少しピッチを高く演奏すると、「三番叟」らしく華やかな曲として迫力が上がると思います。

楽譜製作室

<https://youtu.be/BU08gz11-E>

【新三番叟】 一九六二年 唯是震一作曲

【編成】 三弦Ⅰ・Ⅱ

【難易度】 ★★☆☆☆☆



「第28回 唯是震一追悼ファミリーコンサート」

日時：5月27日(水) 19時～

会場：四谷区民ホール

入場料：3千円

賛助出演：中川善雄 酒井帥山

プログラム：半夜 祭礼 雪人形 善知鳥 三曲第一番 (全唯是震一作曲)

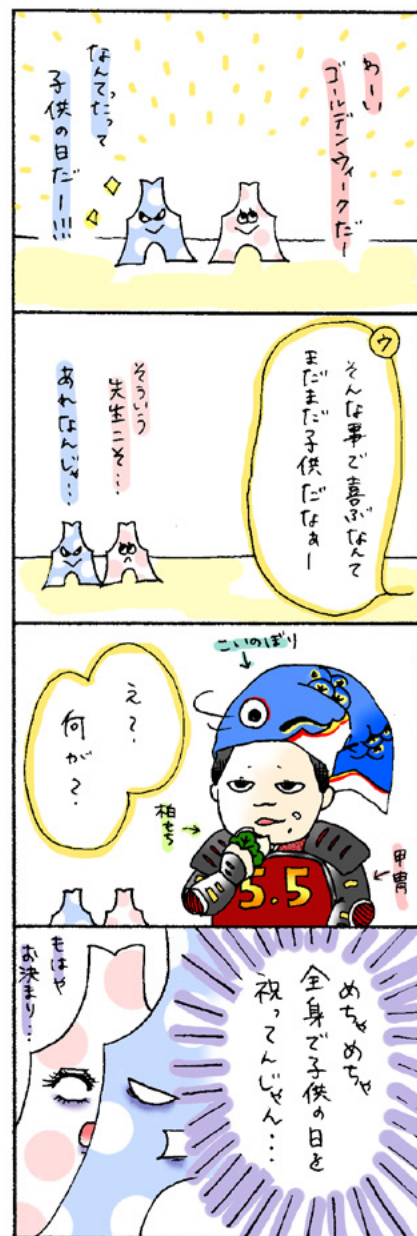


Illustration: morimoe

◎あとかぎ◎

三番叟は元々、能の「翁」の一部。翁の三番目の演目が文楽や歌舞伎に取り入れられ、今日では翁よりも三番叟の方が有名になった。三番目と言っても、室町時代には一番目の「父尉」は省かれていたそうだから、あと数百年もしたら、三番叟だけになっている可能性もある。

その翁は謎に満ちていておもしろい。まず「とうとうたらり たらりたらりあがり たらりとう」などという呪文から始まる。意味は諸説あって、よく分からない。テクマクマヤコンとか、エコエコアザラクと似た感じと言ったら怒られそう。さらに翁というのはつまり老人のこと。昔の人は子どもと老人は厳密には人間でなくて、神に近い存在と考えていた。だから神様は老人や子どもの姿で現れる。大友克洋の「アキラ」が子どもなのも、映画「2001年宇宙の旅」の最後の方で胎児が出てくるのも同じかもしれない。実際、能の翁は北極星と胎児の化身でもあるそう。

能の翁は神に近い存在の呪師だから、無意識でないと見えないらしい。だんだん神に近い年齢になってきた身としては、子どもにまた近づいて来たのは理解できる。理性が弱くなってきた、無意識がより強くなってくる。だから昔の絵師などは六十過ぎてからいい絵が描けるのだ。日本の芸能は西洋の芸能に比べて、年齢的にかなり上でピークを迎える。日本の芸術が、より無意識の領域に近い、深い表現を求めているからではないだろうか。

グラフィックデザイナー (http://www.1938.jp) みやはらたかお

